

# かぐらおが

第 63 号

平成 2 年 3 月 23 日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 学生課 大倉 毅)

ゆきどけ

第12期生を送るにあたって……下田 晶久…… 2	平成元年度講演会一覧………10
卒業生に贈る………宮岸 勉…… 3	スキー教室………10
旭川医科大学第12回卒業生名簿……… 4	新人生歓迎合宿のお知らせ………10
丘の上の6年間………渥美 敏也…… 4	平成2年度前期分授業料免除及び延納・分納について ……11
学生生活を振り返って………伊東かほり…… 5	平成2年度日本育英会奨学生の募集について…11
卒業にあたって………伊藤 嘉規…… 5	学生教育研究災害傷害保険の加入について……11
退官にあたって………吉岡 一…… 6	学生証の更新及び査証について………12
退官にあたって………笹森 秀雄…… 7	学生団体設立・継続届について………12
1年のあゆみ………8	窓 外………田村 正秀……12



## 第12期生を送るにあたって

学長 下田 晶久

第12期生の皆さん、卒業おめでとう！

本学の卒業生は今回をもって、1,252名を数えるに至り、諸君は優に1,100名を越える同窓の先輩を持つ新人として、晴れの門出を迎える事となった。6年間の長い学生生活を通して、選択の余地なく基本的な医学の全般を学習する日々が続き、その努力が報いられて医学士の称号を獲得したのであるが、これからは広い医学の分野の中に自分の志す専門を見定め、これを深めて自立を計る為の道を歩み始めることになる。各自の選択の背景や動機は様々であろうが、決めるのはあくまで諸君自身である。それがいかに困難を伴う道であろうとも、人生において自ら選び取った道を歩む事が出来る幸せに勝るものはない。今この人生の大きな節目に当り、その幸せを十分に噛みしめて欲しいと思う。この喜びこそが、臨床であれ基礎医学の研究であれ、終生病める人々の為に働く使命感の支えとなるからである。

近頃 Quality of Life と言う言葉をしばしば耳にするようになった。1950年代に言い出されたこの概念は、本来深遠な生命倫理の広範な課題を包含し、誰がどの様な基準で個人の生存の質を判定するのかと言った、甚だ難しい問題を妊んでいるが、昨今医療の現場でも広く取り上げられる傾向にある。特に末期医療と言う特殊な状況の中でこれが問われる場合には、主に不治の病の末期における、これ迄の医療のあり方への反省を込めて用いられているようである。つまり、現代の医学に可能な最新の治療法を重ねても、患者さんに大きな負担を与える一方、比較的短い日数しか命を延ばす事が出来ないと判断される場合に、その様な積極的治療を断念し、苦痛の軽減と心の平安を主眼とした保存的治療を選択する拠りどころとして用いられて居る。そこで、実際にこの様な厳しい場面に立たされる判定者としての主治医の立場を考えてみると、先ず第一に、疾患の転帰を予測する確かな医学知識、第二に、意図する治療を確実に行う技術、そして第三には、患者さんの悩みを深く理解し共に悩む労を惜しまない豊かな人間性が備わって居なければ、医師として積極的治療を断念するような治療方針の選択は容易に出来るものではない。

ところで、この新しい医学知識、確かな技術、そして豊かな人間性の3つは、不治の病に限らず全ての種類の医療において、医師が1つとして欠くこと無く備えて居なければならない要素であって、それらはいずれも、医師一人ひとりが自らの努力の積み重ねによって、次第に身に付けて行くほかはないのである。その達成には、これでよしとする完成の日など望み得ないものであり、言わば諸君は今、このゴールの無いマラソンのスタートラインに立った事になる。学年末ごとに試験があり、その都度一応のゴールを味わって来たこれまでの学生生活を、たまらなく懐かしく思い起こす日がいづれ訪れる事であろう。卒業後7年にして諸君の先輩の一人は「誰よりも患者さんから多くの事を学んだ」と言い、10年を経たある先輩は「患者さんが過ぎて来たであろう豊富な人生の最後の時の主治医として、どれだけ応える事の出来る人間であるかが問われる」と述懐して居る。これら多くの先輩を先達として、共々新しい時代の医学の担い手となって貰いたいと心から願うものである。

狭い意味の医療が必要とする医師の数は、我が国においてもも早や不足とは言えないかも知れないが、発症を予防する健康管理や病後の care をも視野に入れた、きめ細かな保健医療への貢献が、これ迄にも増して医師に期待される時代となりつゝある。来たるべき21世紀における医人の活躍の場は、今より遥かに拡がっているであろうと予想される。一方、この地上には最も新しい医療技術の恩恵に浴し得る人々が居る反面、極く基本的な医療さえも受けられない人々もお存在する現状にある。身近には我々の北海道に、遠くは世界各地にその例を思い浮かべることは、誰も容易であろうと思われる。こう言った医療の地域格差の解消も、今後益々社会の要請として強まって来ることであろう。この様な時代の中で展開される“遥かなる修業の道”への門出に当って、今日の喜びに裏付けられた初心を思い起こすすすがにもと、最後に「医師の一員に加えられるに当り、我が生涯をヒューマニティに捧げることを誓う」とうたったジュネーブ宣言の冒頭の言葉を餞としたい。



# 卒業生に贈る

精神医学講座 教授 宮 岸 勉  
(第六学年担当)

十二期生の皆さん、御卒業おめでとう。

勉強に明け暮れたこの六年間を長かったと思う人も束の間の年月であったと思う人も、振り返ってその感慨はさまざまであろうが、何と云っても卒業というのは嬉しいものであり、まして生涯で最後の卒業式ともなれば、喜びと安堵の気持ちもひとしおであると思う。そして、皆さんと同じようにこの日を心待ちにされ、誇らかに思っておられるのは、経済的な支援をはじめ、陰に陽に皆さんを支えてこられた御家族や周りの多くの方々であろう。くれぐれも感謝の気持ちを忘れたくないものである。

やがて国家試験が済めば、「知的専門職」の一つである医師としての人生が始まる。誰からも「先生」と呼ばれる立場となり、医師という資格に関する限りでは、知識も臨床経験も豊富な先輩の「先生」と対等である。しかし、ここは謙虚に考えてみなければならない。患者の期待と信頼に応えるべく「今の自分にどこまでのことができるか」をである。一朝一夕では一人前になれそうもないのが「専門職」と呼ばれる由縁でもあるから、これからの皆さんに与えられた課題は、在学中に得た知識や経験に自らの努力で豊かな肉付けをして、一步一步着実に頼もしい「先生」へと成長していくことであり、これは、基礎医学の研究者になろうとする人の場合も当然のことである。

さて、ここからは思いつくままに二つ三つ書こうと思う。

## ●謝恩会

卒後三十年を経た今でも謝恩会の情景を折にふれて思い起こすが、出席して下さった数多くの教授がどのような話をされたのか、残念ながらほとんど私の記憶にはない。ただし、例外の教授が一人だけおられる。当時、道外のある大学から着任されたばかりのY先生であったが、わずか二三分の短いスピーチで次のように言われた。「諸君は名医になろうとする前に、まず良医になるように心掛けることが大切である。自分は四十歳を過ぎたばかりで、まだまだ良医には程遠いが、諸君と共に精進したい」。私は、Y先生のこの言葉を当たり前のことと聞き流してはならないと思ったし、先生の凛とした表情を憧憬に近い思いで凝視したことを今も忘れていない。

## ●臨床実習の感想文

旭医大新聞(第四十九号)に書いたことを、もう一度ここに載せておきたいと思う。昨年の七月に皆さんが書いた感想文の中に、後輩への助言の一つとして次のようなものがあつた。「医師としての責任感を臨床実習で培うこと。そして、医師が最終的に問われるのは人間性で

あると思う。実習が始まる前から、改めて自分を厳しくみつめ直すことが望まれる」。この言葉も、当たり前のこととして聞き流してはならない。皆さんより多少早い時期に医師となり、これまで臨床に携わってきた私としても真に心すべきことである。そして、皆さんもこれからは同期生のこの言葉をますます肝に銘じてほしい。

## ●3Sの医師

最近のある医学雑誌の編集後記に「3Sの医師」ということが書いてあつた。3Sとは誠実、信頼、清潔であるという。患者から十分に「信頼」され得る医学的知識、医療技術、臨床経験を身につけ、「誠実」な診療を行うことに異論があろうはずはない。とはいえ、医師側では誠実を旨として行動しているつもりでも、患者に不信感をもたれてしまうことは時に起こり得ることである。これは、患者や家族側の心の機微をとらえようとする配慮が乏しければ、医師側の百パーセントの誠実すら徒になりかねないということの意味している。医療行為に対する苦情や不信感をあらわに書きつづつた患者側からの投書を読めば、このことがよく分かる。特に、臨死患者に接する場合などは、医師が語りかける言葉や態度の一つ一つがもつ重みは計り知れないものであり、それが、患者のぎりぎりの苦悩を和らげるか否かを左右するものであることを、私達は決して忘れてはならない。

なお、三番目に挙げられている「清潔」は、いうまでもなく心身の身だしなみの基本を意味している。

## ●今ここに立ち止まる

日本医学教育学会が昭和六十三年に出した「期待される医師のマナー—実践をめざして」という本の中には、医師にとって耳の痛いことが沢山書かれている。一言でいえば、「先生」になるということは実に大変なことだという思いがする。この本が序文で指摘していることは、「先輩医師は後輩医師の範となるべき態度を身につけよ」ということであり、第二章では「まず社会人としてのマナーを十分身につけた上で、医師という専門職に従事せよ」と反省を促して、身だしなみ、挨拶、言葉使い、公私の区別、責任感等々に細かく言及している。皆さんが卒業を迎えたこの日に、私は、今しばしの時間をここに立ち止まって、社会人かつ医師としての自分自身と、この本の中身とを照らし合わせてみようという神妙な気持ちになっているのである。

十二期生の御卒業を心からお祝いし、将来の活躍を大いに期待している。

# 旭川医科大学第12回卒業生名簿

## 丘の上の6年間

渥美 敏也



そろそろ道路の雪が融けはじめ、北海道独特の春のおいがしてきました。卒業を目前にすると6年前の春を思い出します。丘の上の白亜の建物を見た時、大

学生生活あるいは将来に対する夢や希望を抱いたものでした。

長いようで「アッ」という間の大学生活が終ろうとしている中で、今私が感じているのは、自分がいかに無知であるかという事です。臨床実習では患者さんに質問されても、「そういう事もあるかもしれません…」などとごまかしてしまった経験を何度かしました。先日高校時代の友人に逢う機会があり、その時に「もう盲腸の手術くらいできるのか？」などと聞かれ、返事に困ってしまいました。ですから卒業するとはいっても、学生時代のゴールに迫っていたというより、医師としてスタートする気持ちの方が強いわけです。

しかし大学生という立場から考えると、やはり卒業するわけで、学生時代を振り返ると、いろいろと感慨深いものもあります。思い出というものは、楽しかった事よりも苦しく辛かった事の方が印象に残るものであります。

私の場合辛かった事は「クラブの練習」でした。我が男子バレー部は体育系のクラブにしては珍しく「走らないクラブ」でありましたが、練習（ただしボールを使う）はかなりハードであり、合宿では朝、昼、晩と練習、練習また練習でありました。しかしどんなに辛い練習でもクラブ全体が一つにまとまり、目標に向かって前進する事は素晴らしく、目標に手が届いた時の感動は一生忘れないと思います。

バレー部は走らないと書きましたが、数年前までは大学の周りを一周ぐらいいは走ったものでした。私事で申し訳ありませんが、この場をお借りしてバレー部の後輩達に言いたいと思います。「もっと走れ！」

もう一つ辛かったのはやはり試験でした。学年が進むにつれて、一晩で記憶すべき量も増えて、4年生や5年生の臨床の試験は超越していました。これは目標に達しても感動などはなく、ただ解放感に浸るだけでした。試験の目的は進級や卒業だけではないとは思いますが…。

最後になりましたが、在学中にお世話になった諸先生、先輩方、学生課の皆さん、保健管理センターの玉川さん、（自分達が飲み食いした後も片付けられない学生が沢山いる）大学を掃除して下さった皆さん、後輩の皆さん、そして共に過ごした同期の皆さんに心から感謝したいと思います。私は旭川を離れることになりましたが、旭川医大卒業生として、その名に恥じないよう精一杯努力してゆきたいと思います。

## 学生生活を振り返って

伊東かほり



小学校入学以来の学生生活18年間は、振り返ってみると長い道程でした。しかし、今、大学の卒業に立ちみるとあっという間の出来事のような気がします。

何よりもここまで支え、育て、導いて下さった両親、恩師、友人達に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

6年間の旭川の印象は「暑く寒く気候の最悪の土地」でした。しかし、入学当初から友人に恵まれ同じアパートに同級生が多勢いたので淋しくはありませんでした。そして、そこから、6年間の最大の喜びとして心から折り合える友も得ることができました。

1、2年生の頃は夜毎、夜中まで遊び、次の日は朝8時40分まで大学へという生活をしていました。よく体力があったものです。しかし、さすがに3年ともなると朝から生化、解剖などの実習の嵐と共に専門講義も始まりそんな生活は出来なくなりました。そして交際範囲も今までの近所の人から（出席番号の近い）グループの人との付き合いと広がりました。これは、今までと異なり自

分で選択した相手ではないので考え方、行動形式等異なる人ばかりで初めは面食い、仲よくできるか不安でした。しかし、朝から晩まで一緒に実験等を行うと次第に打ち解けて今では、私の掛け替えのない頼もしい友人となっています。

こんな大学生活を過ごす一方でクラブ活動も楽しみました。私が入部していたのは新聞局とワングル部でした。新聞局では人に物事を伝える事、自分を伝える事の難しさを勉強させられました。ワングル部ではコンパ部員ながらも2度程先輩に連れられ今は、噴火の為登山禁止になっている三段山に登りました。日頃机と向かい合う日常生活の中のスパイスとして自然と戯れる贅沢を味わうことを知りました。そして、どちらにしても、先輩、後輩、同級生共に大学の教養では学べないものを私に教えてくれました。感謝したいと思います。

やがて5年の1月からポリクリが始まり6年生となりました。クラブ活動もままならず、病院実習、レポートに明け暮れ目前に迫る卒試、国試、進路の決定、卒業。

物事に終わりが来るように入学の時に、卒業があると知っていました。卒業は悲しいものです。しかし、卒業は終わりと同時に始まりだと思います。これから先、私達の未来は何が待ち受けているかは想像もできませんがきっと思い出はこの卒業に戻りそこから学生生活を振り返るでしょう。振り返りながら学生生活に学んだ事を生かし前進していきたいと思います。

## 卒業にあたって

伊藤 嘉規



まだ残雪の見られる旭川に降り立ち、大学生活に希望を膨らませて、旭川医大に入学してから6年、長い様で短かった歳月でした。

今思い返すと、私の大学生活の大部分は、陸上部との付き合いで占められていた様な気がします。1年の時入部して以来、練習がきついと感じた事もしばしばありましたが、素晴らしい先輩や後輩達に恵まれて何とか6年間続ける事が出来ました。夏の東医体は、個人では活躍する場面はなかったのですが、6年間で総合優勝2回、準優勝4回と好成績を残す事が出来、あの優勝の感激を味わえて、とてもよい思い出となっています。特に、1年の時の横浜の東医体は、1日目大雨、そして2日目晴天の下での総合優勝、その後の祝勝会での大きな優勝カップで飲んだビールのうまかった事、生涯忘れられないと思います。また、夏の暑い中、グラウンドを汗して走り回ったり、砂場で跳んで砂塗れになったり、練習後の冷たい水のうまさ、冬の辛い体育館や階段での練習、練習の合間に交わした先輩や後輩達との他愛無い会話、旭川医大ならではのグラウンドから見る大雪の山並みや夕日の

美しさ、どれもこれも大学生活の思い出の1ページとして脳裏に焼き付いています。

私の大学生活は陸上でしたが、他のスポーツ、趣味、勉強、何でもいから、何か1つ大学生活で一生懸命やり遂げた事があれば、きっと将来何か役に立ち、壁にぶつかっても頑張っ乗り越える力になると思います。6年間は意外と早いものですから、後輩の皆さんも、悔いを残さぬ様、有意義な大学生活を送ってもらいたいと思っています。

卒業して、国家試験に合格すれば、一人の医師として社会へ出るわけですが、まだまだ不安な事いっぱいです。旭川医大で6年間学んだ事を基礎に、患者と同じ立場に立って、患者が私達に本当に求めているのは何か、患者の気持ちを理解し、また患者の痛み、苦しみ、悩みに共感出来、さらに信頼されるような医師となる、これは私の理想であり、実際には大変難しい事だと思いますが、少しでも近づけるように生涯努力を続け、旭川医大卒業生である事を誇りにして、その名に恥じないように社会に貢献していきたいと思っています。

最後になりましたが、未熟な私を熱心に指導して下さいました先生方、いろいろお世話下さった職員の方皆さん、そして、6年間美味しい食事を作ってくれた下宿のおばさん、その他いろいろな面で私を支えてくれた周囲の人々に感謝しつつ、思い出深い旭川から新しい世界へ旅立ちます。



## 退官にあたって

小児科学講座 教授 吉 岡 一

私が赴任したのは昭和49年4月のことである。まだ建物がないから研究室は市立病院のなかの空き屋の病棟に置かれることになった。当然のことながら研究設備も図書も揃っていないで不便が多かった。下駄履きで人が廊下を歩くと音が天井にこだました。流しの窓からは金星橋をひっきりなしに行き交う自動車がちょうどマッチ箱のように見えた。

翌50年には研究棟ができて現在地に引越した。臨床の講義はまだ始まっておらず、病院も建築中なのでプロバさん達も近づかない。静かなものであった。昭和51年には西病棟が完成した。黒々とした鉄骨の固まりが次第に病院らしくなって行って、同年11月には開院式典が行われた。寒い日であったが晴れ上がり、時どき雪が舞っていた。待望久しかった私たちの病院が動き出すのである。放たれた色とりどりの風船が空に昇って行くのを見上げて、私たちは涙の出る思いだった。

開院までの2年間、大学での仕事が無かったかわりに、学会関係の仕事が次から次へと押し寄せてきた。昭和49年赴任と同時に、まだあまり仕事も多くないだろうから、という理由で小児科学会の理事に推された。昭和50年には学会長の坂上氏が健康を損ねられ、かわって私が小児科学会々長をつとめることとなった。瓢箪から駒とはこのことである。

ところで、小児科学会は“もめる学会”であった。火種はいくらもあった。砒素ミルク事件、サリドマイド事件、大腿四頭筋硬縮症、未熟児網膜症、などである。砒素ミルクとサリドマイドは両事件とも10年以上も前の出来事であったが、多くの子供たちはなお後遺症に苦しんでいた。被害者が学会の会場などで会員に現状を訴え理解を得たいというもので、これに若い医師たちが同調したものであった。医師であれば患者の話しを聞き苦痛を理解しようとするはごくあたり前の話しと思っていたが、大家たちは、このような場合ひたすらに対決するか、または現場からいなくなってしまう場合が多いのは、まことに不思議なことと思われた。

かぜぐすりの筋注による筋硬縮症は、なお各地で発生が続いていた。当時ホットな問題であり、早く対策を講じなくてはならなかった。私は会長として筋硬縮症委員長の巷野氏とともに厚生省の記者クラブで記者会見をして、かぜに筋注を行わないように注意を喚起した。以後かぜへの筋注は姿を消したが当時の日医の武見会長は、新聞記者ごとき素人に何がわかるか、と激怒された由で

ある。事前に根まわしを怠ったことは、今にしておもうとひとつの反省点である。

未熟児網膜症もそのころ全国で訴訟が相次いでいた。酸素を与えすぎると失明するという。かといって使用を控えると死亡率が上がるというジレンマを解決しなくてはならなかった。昭和51年の新生児学会は私が会頭をつとめたが、総会で“守る会”の代表に発言をしてもらい、またこの病気についてのシンポジウムを開くなど、産科医、小児科医に研究を呼びかけた。そのうち経皮酸素分圧計などのすぐれた器具が次々と開発され、この難問も解決に向かった。

昭和56年から60年まで、黒田学長のもとで病院長をつとめさせていただいた。いろいろの経験のうち、一番つらかったのは、患者さんの事故であった。4年間の在任中、数件の人命事故があったように思う。病院は私たちの病いを癒し苦しみを救う所と信じていただけに心の痛む出来ごとであった。

ところで最近の経済発展にともなって医療技術の高度化は目を見張るものがある。これからは我々の先輩が経験したことのない先端技術の世の中となるに違いない。高度の技術といえば臓器移植などがそのトップであろうか。本院に設備される予定のMRIも、新薬の開発ひとつにしても高度の医療技術には、いずれも途方もないお金がかかるものようである。その結果医療の重心が経済活動に傾く惧れもないわけではない。莫大な医療費を先端医療のためにつぎ込むことも必要であろうが、病院の看護婦さんの定員を増加し、一人部屋の数を多くするなど、患者さんが今よりもゆとりをもって闘病生活ができるような方向の環境整備をすすめることもまた必要なのではないだろうか。このことは患者さんの quality of life を大切に考える方にも通ずると思う。

医療は聖職としての医師の仕事 (profession) と経済活動 (business) の2つの要素から成り立っている。ヒポクラテス以来、私たちの先輩は苦心して両者のあいだのバランスを取ってこられたように思われる。社会により時代により、それは振り子のようにゆれたのであろう。それにしても、近頃の医療はやや business に重心が傾き過ぎているのではないか、という指摘がある (JAMA 236: 86)。とすれば実行は必ずしも容易なこととは思われないけれども、患者さんの身になり心となって診療してあげる部分、つまり医師の profession のほうに重心を振り戻すような努力を、現役の皆さんには期待したいと思う。



# 退官にあたって

社会学教授 笹森秀雄

私はこの3月31日に定年により退官いたします。先輩の諸先生方をお送りするたびに、「そのうち私も……」と心に決め準備はしていたのですが、いざ退官ということになりますと、やはり感慨ひとしおのものがあります。

私は昭和27年に北大文学部を卒業し、直ちに同学部の助手に採用されてから21年間、そして旭川医科大学で17年間、計38年間をこの2つの大学で過ごさせていただきました。

学生時代の3年間とそれに続く21年間の北大での生活におきましては、何といても鈴木栄太郎先生という素晴らしい恩師にめぐりあえて社会学という学問を学び、しかも先生のもとで研究者としての第一歩を踏み出すことができましたこと、また昭和40年代前半から繰り広げられました例の学生運動のなかで、教師としての自信と誇りを失いかけて苦悶の日々を送った頃のことなど、昨日の出来事のように思い出されます。

しかし、私の心のなかに最も強烈に焼き付いて離れませんのは、やはり旭川医科大学での生活であります。特に創設準備室時代の1年有余の間と、開学後の1、2年間の思い出は、おそらく生涯消えることはないでしょう。

私が当時の文学部長鳥山成人教授から、「君は旭川医科大学の進学課程責任予定者として人文社会系4学部から推薦されているので、是非承諾してもらいたい。」という連絡を受けましたのは、昭和47年6月初旬のことでした。私にとってはまさに晴天の霹靂ともいえる出来事でしたが、このことが結局は私が17年もの間旭川医科大学にお世話になる機縁となったものであります。準備室時代の思い出につきましては、本紙「かぐらおか」の第2号に述べる機会がありましたし、また第1期生の入試や入学式、あるいは授業実施上の苦労談等につきましても、『旭川医科大学十年史』（昭和60年）を執筆した際に触れるところがありましたので、ここでは再び述べることをいたしません。

私にとって17年間は、短いようでもありました長いようでもあります。しかし、いづれにいたしましても、この間、私は初代学長山田守英先生、2代学長黒田一秀先生、そして現学長下田晶久先生をはじめ、多くの先輩・同僚の諸先生方、そして事務局の皆様大変お世話になりました。これらの方々の寛容とご援助がなかったならば、今回の定年退官の喜びはあり得なかったものと思います。心から御礼申し上げます。特に一般教育の先生方には、公私にわたり特段のご厚誼を承りました点、ま

ことに有難く感謝の言葉もございません。今後もしよろしく願っています。

学生諸君とは、また違った思い出がたくさんあります。1期生や2期生の学生諸君とは、教師と教え子という関係以上に、苦難を共に乗り越えてきたという一種の「同志」的な感情の共有があります。学校のすぐれた伝統は、多くの場合、1期生や2期生の活動如何によって決まるといわれています。今後とも、大いに頑張ってもらいたいものと思います。そして後輩の学生諸君は、先輩の良い点を学び、情性に甘んずることなく、自己に厳しく生きていてもらいたいと思っています。

私は赴任以来、ワンダーフォーゲル部、障害問題研究会、そしてチャリンコの会の3つのサークルの顧問教官をしてまいりましたが、そのなかで、講義だけでは経験することのできない数々の素晴らしい思い出をもちえたことを、大変幸せに思っています。サークル活動は、若い学生諸君にとっては、人間形成の道場であり、自分自身に計り知れない影響を与えるものであります。どうか、よいサークル活動を育てあげていくよう努力してもらいたいと思います。

私の書齋に、恩師鈴木栄太郎先生から丁載した1枚の額があります。そこには次のような1句が書かれています。

学業の1つの峰を今越へぬ  
行く手に見ゆる峰は数なし

私はこの4月から、引続いて北海道東海大学国際文化学部勤務いたします。これからは、師の詠まれた歌を座右の銘として、残された人生を、北海道文化の究明に捧げたいものと決意を新たにしております。

旭川における17年間は、私にとって実に素晴らしい日々でした。今大学を去るに当たり、心から御礼申し上げますと共に、諸先生方、事務局の皆様、そして学生諸君の御発展を心から祈念してやみません。



## 平成元年度

# 1年のあゆみ

### 4月

- 7日 平成元年度入学式（於 体育館）  
〔新生 100名（うち女子学生24名）〕  
17日 新生研修 第1回目（於 第2～4セミナー室、  
18日 和室）



第15回医大祭



第17回入学式

### 5月

- 17日 医師国家試験合格者発表  
（本学合格者 132名、合格率 93.0%）

### 6月

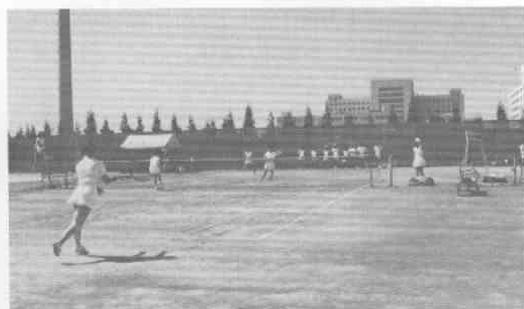
- 15日 第15回医大祭  
18日 テーマ：『Be More Energetic!!  
～そういうのもたまにはいいんじゃない?』  
（医大祭実行委員会委員長 平沢克巳）  
30日 学位記授与式（於 第二会議室）  
（学位記被授与者 6名）



第36回地区体

### 8月

- 8月8日 第32回東日本医科学生総合体育大会冬季大会  
3月23日（主管校 群馬大学医学部）  
〔本学参加種目〕ラグビー、スキー  
10日 平成元年度納骨式（於 本学納骨堂）



四医体

## 9月

- 6日 体育大会 (主催 学生)  
〔学年対抗〕サッカー、バレーボール、テニス、  
綱引き、リレー、駅伝  
〔有志対抗〕ソフトボール
- 16日 平成元年度公開講座  
30日 「病氣とくすり」
- 20日 平成元年度解剖体慰靈式並びに文部大臣感謝状伝  
達式 (於 体育館・第4セミナー室)
- 30日 学位記授与式 (於 第二会議室)  
(学位記被授与者 6名)



新入生研修 (第2回目)

## 12月

- 18日 スキー教室 (於 北大雪スキー場)  
19日 講師3名、厚生補導委員会委員1名  
参加学生34名
- 25日 学位記授与式 (於 第二会議室)  
(学位記被授与者 5名)

## 1月

- 13日 平成2年度大学入学者選抜大学入試センター試験  
14日 (本学会場 624名)

## 2月

- 7日 笹森教授最終講義  
26日 平成2年度大学院入学者選抜試験  
(受験者 21名)



吉岡教授、笹森教授歡送式



解剖体慰靈式

## 10月

- 26日 新入生研修 第2回目  
31日 (於 第3～4セミナー室)

## 11月

- 5日 本学記念日



スキー教室

## 3月

- 1日 吉岡教授最終講義  
5日 平成2年度入学者選抜第2次試験  
6日 (受験者 502名)  
14日 吉岡教授・笹森教授歡送式  
15日 平成2年度大学院入学者選抜試験合格者発表  
(合格者 21名)  
21日 平成2年度入学者選抜第2次試験合格者発表  
23日 学位記授与式 (於 第二会議室)  
(学位記被授与者 11名)  
第11回卒業証書授与式 (於 体育館)  
(卒業生 122名)

(庶務課・学生課)

## 平成元年度講演会一覧

開催日	演 題	演 者	担 当 講 座 等
6月6日 (火)	局所麻酔薬研究に関する最近の知見	大阪市立大医学部 教授 藤 森 貢	麻酔学
6月20日 (火)	医学とバイオエシックス	京都大学医学部 教授 星 野 一 正	哲 学
7月10日 (月)	画像伝送システムについて	北海道大学医学部 教授 入 江 五 朗	医療情報システム企画 室
7月10日 (月)	医療情報システムについて	北海道大学医学部 助 手 工 藤 俊 彦	医療情報システム企画 室
8月24日 (木)	経皮的経静脈的僧帽弁交連裂開術の進歩について	医仁会武田病院 医 師 井 上 寛 治	内科学第一
8月29日 (火)	白血病における出血の問題	西ドイツ フライブルグ大学 教 授 アントン・ズトール	小児科学
10月19日 (木)	LHRHニューロンの起源について —In vivo 並びに移植実験から	徳島大学医学部 教 授 大 黒 成 夫	解剖学第二
11月15日 (水)	副腎・性腺疾患と性分化の異常	アメリカ ジョーンズホプキンス大学 教 授 クロード・ミジョン	小児科学
2月23日 (金)	HLA の遺伝子構造と疾患感受性	東海大学医学部 助教授 猪 子 英 俊	病理学第二
3月9日 (金)	神戸大学における医療情報システムについて	神戸大学医学部附属病院 助 手 宮 本 正 喜	医療情報システム企画 室
3月9日 (金)	北海道大学における医療情報システムについて	北海道大学医学部 助 手 工 藤 俊 彦	医療情報システム企画 室

## ス キ ー 教 室

12月18日(月)・19日(火)の両日、恒例のスキー教室が、34名の学生が参加して、北大雪スキー場で実施された。

第1日目は開講式の後、午後1時から3班に分かれて実技講習が実施され、また夕食時には交歓会やビデオ観賞などが行われた。2日目も好天のなか、9時から午後2時まで、熱心な講習が行われた。

(学生課)



スキー教室

## 新入生歓迎合宿のお知らせ

例年通り、今年も来たる4月7・8日に新入生歓迎合宿を行うことになりました。予定内容として、学校においては、実際に現場で働いている先輩を招いての講演会(ためになるよ!）、各クラブ紹介(おもしろいよ!)クラブ出店(つかまるよ!)がある。その後、温泉宿まで出向いて先輩方と語るグループ討論会(あんまりつままないでね!)、新入生全員の自己紹介(期待してるよ!)、クラブ勧誘(しつこいよ!)、そして皆で飲みあかすのだ。と、言っても酒を無理遣飲ませないから救急車の心配はありません。そして、だめ押しに、もしかしたら、4月8日にはスポーツ大会(バレーのみ)があるかもしれません。以上のように、盛り沢山の内容となりますのでお楽しみに!

(新入生歓迎実行委員会より)

## 平成2年度前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成2年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する者で、下記基準のいずれかに該当すると思われる者は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り、平成2年4月2日(月)～4月21日(土)までに申請してください。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

### 記

#### 1. 授業料免除基準

- (1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合  
 なお、平成2年度において原級に留置かれている者又は最短修業年限を超えて在学している者は、免除の対象としない(休学を理由による者を除く。)
- (2) 授業料納期前6月以内(新入生については、入学前1年以内)において学生の学資を主として負担している者(以下「学資負担者」という。)が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合
- (3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

#### 2. 申請書類

- (1) 授業料免除申請書
- (2) 授業料延納・分納願
- (3) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書
- (4) 災害を受けた場合は罹災証明書(市区町村、警察、消防署が発行したもの。)
- (5) 市区町村発行の所得証明書(給与所得者については、平成元年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成元年分の確定申告書(一面・二面)等の写し(生計を一にする家族全員分)を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。)
- (6) 失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書
- (7) 生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書
- (8) その他家庭事情により参考となる証明書等



## 平成2年度日本育英会奨学生の 募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため修学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合もあります。

奨学生の募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する者は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

## 学生教育研究災害傷害保険の 加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり、下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

まだ加入していない学生は、加入するようにしてください。

### 記

1. 受付期間 平成2年4月2日(月)～4月28日(土)
2. 受付窓口 教務部学生課厚生係
3. 保険料
 

6年間	4,050円
5年間	3,500円
4年間	2,900円
3年間	2,250円
2年間	1,550円
1年間	850円
4. 支払い保険金の種類と金額

区 分 種 類	正 課 中	学校施設内の休憩中・ 学校施設内外の課外 活動中(学校施設外 の課外活動について は、大学に届出た活 動に限る。)
	学校行事中	
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺障害保険金	54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金	治療日数4日以上 が対象 6千円～30万円	治療日数14日以上 が対象 3万円～30万円
入院加算金	1日につき4,000円	1日につき4,000円

## 学生証の更新及び査証について

学生証は、3年毎の更新及び毎年度の査証が必要です。平成2年度も4月2日(月)から次により行うので、忘れずに手続を行ってください。

○昭和62年度及び昭和59年度入学者

更新が必要なので、学生係で旧学生証と引き換えに、新学生証を受け取ること。

(まだ、新学生証用写真を提出していない学生は、至急提出すること。)

○上記以外の学生

査証が必要なので、学生係に学生証を持参すること。

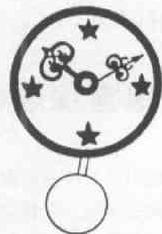
(学生課)

## 学生団体設立・継続届について

平成2年度において、学生団体を新しく設立もしくは活動を継続する団体は4月2日(月)から4月28日(土)の間に設立届及び継続届を学生係に提出して下さい。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものととして処理するので注意すること。

(学生課)



# 怒外

田村 正秀

想いつくまに

昨年秋14年振りに米国を訪れた。ジャズ発祥の地ニューヨークでの心臓病学会に出席、帰路国際的医用企業メドトロニックの招待で北端の地ミネアポリスに立寄った。朝8時副社長さん達と朝食を共にしながらのミーティングに始まり分刻みのスケジュールに些か閉口したが研究所では何年か先の実用化をめざした生体材料、超小型植込刺激装置、ポンプなどの動物実験をかい間見ることが出来た。工場では臨床使用の弁、ベースメーカーなど製造ラインを見学した。驚いた事にかなりの工程が職人芸とも思える手作業によっていた。案内の技術系マネジャーによると優秀な研究員、技術者をいかに引留めるかが当面の課題であるとか。数年毎に勤続表彰の栄誉を送り仕事と会社に生甲斐を持たす努力を続けているとの事であった。日本では当然とされる企業への帰属意識を育てたいとも語っていた。多分に世界的な創業者が健在(幸いにも夕食を共に出来た)で彼の企業ポリシーに拠るものであろうか。

米国企業は好景気には大量に人を雇い工場を作って儲け不景気になると大量にレイオフする。言わば勤労者の人権を酷く軽視していると理解していた。従来熾烈な自由競争を立前とした米国企業が運命共同体的センチメンタルを基盤とする日本的発想(経済理念)を取入れている様に見え驚かされた。欧米人の理解の範囲にあるか否かは別としてこの日本的発想を支えて来たのは恐らく企業構成員1人1人の仕事に対する責任と生甲斐、創意と工夫への無償の努力、実質を伴わない名誉に対する価値観の違いであったと思われる。

東欧における昨年来の大激変、民主化への雪崩現象から自由主義の優位性が歴史的に実証されたと言う人も多い。なかには日本の自由主義(社会主義に近い資本主義の意か)は21世紀をリードすると予測する偉い先生もいる。しかし今日注目され始めた日本の自由主義の基盤が無償の努力を生甲斐とする日本の美德の上に成立していると理解する人は少ない。この日本の人生観がこの先何時まで生き続け得るかははなはだ疑問であろう。

今日の日本は「あなたの国はニューヨークのマンハッタンまで買占めるつもり」と冗談ともつかぬ皮肉を幾度も聞く程に金持ちに見えるらしい。しかしその割には我国の人並びにその頭脳がもたらす知的生産やその再生産(教育)に対する評価の低さが目立つ様だ。これが基礎研究のみならず診療過程の知的プロセスに対する無報酬に現れているとも言える。保険診療の「出来高払い制」に振り廻され「収入を増すための研究会」が盛んとも聞く。最近の医師会ニュースは医師数20万突破を報じ医師過剰と生活不安到来を警告している。本邦の工業製品がハイテク化と高品質により高い附加価値を生みだしているとも聞く。医療の場でも診療に対する知的プロセスとそのクオリティーに適切な評価と報酬が与えられるとすれば医療の質の向上と同時に医師の生甲斐も増し医師過剰の危機感も緩和されるのではなかろうか。

ともかくも消費税に明け暮れた選挙も自民の安定多数に終り大きな変革は好まれなかった様だ。相変らず膨大な貿易黒字の処理に国は苦慮し続けねばならぬらしい。経済大国と称されながら研究予算が大幅に増えたとも思えない。生活レベルが大きく向上したとも思えず膨大なお金が何処に消えるのか見当もつかない。……

色々御上に文句を言いつつも長年おかみの大学にお世話になっている。多分多少はアカデミックな仕事をさせて貰えた、言わば僅かばかりの生甲斐と経済観念のなさにおう所が大きいと思えて次方がない。

晩年令に達した自分を想い「まあこんな所で満足」と思える人生にしたい。さすれば明日からどうすべきか、自問すれど良い思案は浮ばない。つまりぬ事を書いて後悔しきりである。

(外科学第一講座 助教授)